

創刊号

1995. 6. 22

ゾーン・システム研究会々報

Photographic Society of Zone System

発行者

中島 秀雄

編集部: 東京都港区西麻布4-2-10東城ビル401 ゾーン・システム研究会事務局

ゾーン・システム研究会設立される

【ゾーン・システム研究会 “設立総会”】

期 日 : 1995年1月29日(日)

場 所 : 東京都交通安全教育センター・第一会議室

出席者 : 中島 秀雄

会員 : 赤羽 章司 井口 喜正 宇野 裕 大久保 昌生 太田 清 小野 望 川口 真弘 菅野 慶孝
小井川 元慈 白鳥 保 五来 瑛二 藤原 英樹 古川 翔士 古谷 敏 諸見里 朝和 山本 昭二

※オブザーバー参加 吉田 公子(事務局アシスタント)

【 議 事 録 】

1. 事務局より開会の辞が述べられ、その中で本会はゾーン・システム研究会の“設立総会”にあたる旨説明された。
2. 代表挨拶として、中島 秀雄先生より本会の発足から将来の方向性について、現在の写真会の動向を踏まえた話があった。
3. 議事に先立ち、赤羽 章司が議長に選出された。
また本会は「会員総数23名中16名が出席」し、過半数に達しているのので“成立”していることが報告された。
4. 経過報告は、中島 秀雄先生から研究会の発足に至までの詳しい経緯が述べられた。
特に1988年11月に川崎市民ミュージアムで始まった“ゾーン・システム講座”はすでに7回を数え、その受講者は100名に達していること、さらには他の機関においても同様な講座が開催され、ゾーン・システムが確実に普及していることから本研究会の設立は非常に重要で意義あることとされた。
5. 役員について、事務局より「代表、事務局長、幹事、支部長、監事」の構成(案)が提出された。
審議の結果、中島 秀雄先生を中心として活動しやすい組織とするために「代表、幹事長、幹事」の構成にすることで決定された。
代 表 : 中島 秀雄
幹事長 : 井口 喜正(事務局担当)
幹 事 : 数名(選出は中島 秀雄先生に一任)
6. 会則については、事務局より提出された「会則(案)」に基づいて検討した結果、次の通り決定した。(下記参照)
7. 1995年度活動計画として、技術指導、情報交換、及び研究会運営に関する具体的な課題が検討され、実行可能な事項から着手することとなった。
*技術指導 : 撮影会、見直しゾーン・システム、暗室ワーク、仕上げ、講評、etc
*情報交換 : 写真展や講演会のガイド、ZoneVI USA情報、用品の斡旋、etc
*研究会運営 : 会員の募集、会報の発行、講演会の開催、展覧会の開催、学会活動、etc
8. 1995年度予算について、主として事務局の運営に充てることで了承された。
*事務局運営費(役員会費、通信費、事務用品消耗品、等)
9. 議事終了後、同会場に於いて“懇親会”が催され、自己紹介などを含めてそれぞれの写真談義に花開き、和やかな雰囲気のうちに総てが終了した。

ゾーン・システム研究会々則

代 表 : 中島 秀雄先生

【 役 員 】

幹事長 : 井口 喜正

幹 事 : 赤羽 章司

〃 : 五来 瑛二

〃 : 小井川 元慈

〃 : 諸見里 朝和

〃 : 吉野 光治郎

〃 : 菅野 慶孝

【会則】

第1条：本会は、ゾーン・システム研究会(Photographic Society of Zone System)と称し、設立日を1995年1月29日と定める。

第2条：本会の代表は「中島 秀雄」とし、事務局を東京都港区西麻布4-2-10東城ビル401 (有)エルミニオン内
井口 喜正 気付におく。

第3条：本会は、会員のゾーン・システムの深化と、ファインアート・フォトグラフィーのグレードアップをはかる、そして
写真を心から愛する人々への普及をも目的とする。

第4条：本会は、前条の目的を達成するため、下記の活動を行う。

- 1) ゾーン・システムあるいは新技術に関する調査・研究
- 2) 撮影会、講評会、ワークショップ、セミナー等の開催
- 3) 会報の発行
- 4) 作品の制作・発表、展覧会等の開催
- 5) その他

第5条：会員は本会の趣旨に賛同し、原則としてゾーン・システム講座を受講し、所定の会費を納めなければならない。

第6条：会費は、次ぎの通り定める。

- 1) 入会金 3,000円
- 2) 年会費 10,000円
- 3) 参加費 その都度徴収

第7条：本会則は、1995年 1月29日より施行する。

“ゾーン・システム研究会の発足にあたり”

【電子写真の台頭】

先頃二つの電子写真に関するセミナーがありました。日本写真学会の“写真作画に於けるデジタル化の現状と展望”、もう一つはIPPFの“デジタル写真95”で、二つとも受講者は満員で、写真関係のみならず、周辺の人達の関心の高さに改めて驚きました。しかし、ここ10年位の写真技術の動向を見ていると次世代の写真技術に情報を求めて集まるのも無理のないことだと思います。AEカメラ、ワインダー付きカメラ、AFカメラ、AE、AF高級カメラと写真家の手間を省き押すだけでいいという方向にあり、写真家もメーカーも、その方向を強め、しかも現像プリントは“人”まかせ“ラボ”まかせ、このまま突っ走れば電子写真に行き着くことは目に見えています。そしてリアルタムに情報の要求が強まれば、私は今後5年以内で報道写真、スポーツ写真をはじめコマーシャルのジャンルでさえも、銀塩写真から電子写真に切り変わって行くと思います。写真の見せ方が印刷ですから、もう少し早まるかもしれません。撮影日、ロケ現場、天気、写真家の癖、その日の気分、カメラ、レンズ、撮影機材、白黒、カラー、絞り、シャッター、露出オーバー、アンダー、カラーバランス、カメラアングル、感性、合成、現像、プリント、水洗、乾燥、修成、製版、レタッチ、印刷、等、電子写真になればいくつかを除いて殆ど無視でき、後の処理は電子オペレーターの仕事になって行くでしょう。アートのジャンルでは絵かきやデザイナーが電子写真の可能性を求めて入り込んで来ることは考えられます。しかし、この分野に写真家が入り込むのは難しいように思います。写真家は被写体に深くこだわります。絵かきやデザイナーは被写体はおろか素材にもあまりこだわらないからです。

【写真に求めるもの】

しかし、我々の写真の楽しみは被写体にこだわり、上に掲げた多くの項目に面白さや楽しみを感じ、手間は掛り不安定であるけれど、思考錯誤しながら、ある種の心地よさや自分の感性をそこに感じ、撮影から現像、プリントまで全て自分で仕上げた後、目で見えた風景や物とは違う白黒のプリントにした時の美しさに、たまらない魅力を感じるのだと思います。木製カメラや蛇腹の膨らみ、手作りに近い金属の精巧なカメラ、マルチコーティングされた新しいレンズ、新しい印画紙の匂い、これらに触れることも我々の喜びだし、楽しみの一つでもあります。もちろんこれらは単なる道具であり素材でしかありません、これらをどれだけ使いこなし、自らの眼の延長にし創造のための道具にするかは一人一人に掛かっていることは言うまでもありません。水の中にあるプリントのゆらぎ、自然乾燥して適当な光の中で見たときのプリントの輝き、こんなエキサイティングなプロセスを私はほかに知りません。嬉しいことに写真を扱うギャラリーや美術館も増え、多くの人々にオリジナルプリントの美しさが自然に受け入れられるようになって来ています。ただ幾つかの展覧会を除き、少し片寄った写真が目につくことに些かの寂しさと残念に思っているのは私ばかりでないと思います。アダムスやウエストン、カボニグロやセクストンの作品に強い写真美学を感じる多くのファンは、彼らがその時代だけを写した写真家だと思っている人は少ないと思います。時間を突き抜けた一人一人の純粋な表現だと見ているはずで、私もそう感じています。又、私は彼らの表現スタイルはアメリカのものだけとは考えませんし、もはや古いスタイルだとも思っていません。

【写真表現のテーマ】

複雑な都市、複雑な人間関係、休むことのないエネルギー、災害、暴力、慣習、行事等に強い関心もあるし、心の痛みも感じます。仕事で撮影に行くこともあるし、記録して置くことも大事なことです。しかし私個人のテーマとしてそれらを写真に撮ることに全く興味も関心もありません。自らの内側にあるテーマを求め、それが周辺で起きている事柄と関係付けることだった

り、自然の中での純粋な形や光、人物や物の抽象的な形だったりするのです。そして、それを探し求め行動しているときだけに自分自身を強く感じ、自由を感じます。ですからそう感じられるところなら何処にでも行きたいと思います。皆さんもそう感じているのではないのでしょうか、一人一人の周辺で起こっている出来事や自然の変化、何処かに出向いた時に偶然に出会った素晴らしい光景や人、また枯れ葉一枚、白のTシャツを着、キャベツ一個に細やかな眼差しと確かな写真技術とで写真にして行くことで、やがて到来する電子写真とはあきらかに違う、今までの白黒写真とも少し違う写真の魅力を提起して行きたいと思います。

【研究会の進め方】

我々は、自然の美しさを印画紙の再現域いっぱいに使って表現することで美しいプリントが出来るとしてゾーン・システムを自分のものにしました、研究会でもこのことを中心に進めて行きたいと思います。そして撮影会やセミナーを開催することで、お互いの情報交換の場とし、技術的にまだ問題があれば指摘をしクリアーにして行きます。また写真評論の専門家に話を聞くことで今まで分からなかった写真の手掛かりにして行きます。我々の最終表現スタイルはプリントにあります、印刷ではありません。また電子写真とも違うし写真のデジタル化とも異なります。あくまでも印画紙の白と、素材の中で最も黒いとされる黒化銀にこだわり続けます。そのことの為に多くの素晴らしい白黒写真を見、必要なら手に入れることも考え、自らの写真の為の教材にしたいとも考えます。ただ我々はある意味で35mmカメラに限界を感じています。物の素材感やトーンの美しさを気にする以上6×6そして4×5まで行きたいと考えております。そして当然のことながら素材の研究もして行く必要があるでしょう。新しい印画紙、現像液、フィルム、引き出し機、水洗器、レンズ等、しかし、今まで述べて来たことがすぐに出て来るとは思いません、少しずつ積み上げて行き、その成果を展覧会という形にしたいと思います。

ゾーン・システム研究会代表 中島 秀雄

【指導料一覧表】

※撮影会、実技講習会、作品講評会等の“指導料”を下記の通り定めたいと思いますので、会員の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

会 名	内 訳	金 額 (1人当たり)
撮 影 会	半 日	3,000円
	1 日	5,000円
	2 日	8,000円
実 技 講 習 会	半 日	2,000円 (消耗品は各自負担)
	1 日	4,000円 (”)
講 評 会	約 4 時 間	2,000円 (お茶、コンタクト、プリントの式)

1995年度活動結果と計画予定

- 1995年 1月29日(日) : 設立総会(東京交通安全教育センター) ⇒ 会員23名中16名が参加
 3月 4日(土) : 第1回セミナー(早稲田奉仕園) ⇒ 平木 収先生の講演会
 3月16日(木) : 幹事会開催(新宿御苑ハイツ) ⇒ 研究会の運営等について検討
 4月29日(土) : 第1回基礎撮影会(横浜港周辺) ⇒ ゾーン・システムの見直し
 5月28日(日) : 第1回講評会(東京都写真美術館創作室) ⇒ (作品の評価と美術館見学) カメラ、露出、フィルム現像、プリント、等、どこに問題があるのか。
 6月12日(月) : 幹事会開催(新宿御苑ハイツ) ⇒ 研究会の運営と活動について、及び会則の確認。
 7月 土、日 : “青木が原樹海撮影会と小部 俊裕先生 自作を語る” ⇒ 川崎市民ミュージアム写真講座、レッツフォトグラフィの講師であり日吉の写真学校の先生でもある小部氏は樹海の撮影人、樹海の案内と自作を語って頂こうと計画しています。(但し、7月下旬になるかもしれません。)
- 9月 (土) : “講評会”
 11月 (土) : “4×5カメラによる写真の特性と魅力”
 1996年 1月 (日) : 第2期総会
 2月 (土) : “暗室ワーク”(プリンティング・ワークショップ)
 3月 (土) : “撮影会”
 4月 (土) : “仕上げ、保存と展示方法、プリントの修整、ドライマウント、収納、ギャラリー

※日程の変更あり